

第4回生命の海科学館見直し検討委員会記録

日時	平成20年10月20日(月)午後1時56分～午後3時48分
場所	情報ネットワークセンター メディアホール
議題	(1) 施設の目的・使命・役割について(協議) (2) 施設の目的・使命・役割を実現するための最適な運営手法について(協議) (3) その他
出席委員	(11名) 伴 捷文(議会代表者:蒲郡市議会議員) 松本 昌成(議会代表者:蒲郡市議会議員) 鈴木 英文(教育分野市内有識者:蒲郡市教育委員長) 遠山 憲章(観光分野市内有識者:蒲郡市観光協会専務理事) 岡本 俊一(市民代表者:公募市民) 永田 武満(市民代表者:公募市民) 長田 広子(市民代表者:女性代表) 牧 信男(市民代表者:地域代表) 小林 憲三(行政代表者:企画部長) 小笠原久和(行政代表者:生命の海科学館館長)
欠席委員	(2名) 小沢 慎治(情報技術分野市内有識者:愛知工科大学教授) 伊奈 義兼(地元産業・経済分野市内有識者:蒲郡商工会議所副会頭)
事務局出席者	4名
一般傍聴	5名

議事

[開会 午後 1 時 5 6 分]

開会

〔議題に先立ち、本配付の資料について事務局から報告〕

情報ネットワークセンター長

今回の委員会に際しては、全部で 5 点の資料を事前に配付させていただいた。

・資料 1

前回までの意見を分類したもの。

施設の役割・使命・目的に関する意見

運営方法に関する意見

運営体制に関する意見

評価方法等に関する意見

その他意見

に分類してある。

・資料 2

運営手法を決めるまでの手順、検討する場合の要点をまとめたもの。

・資料 3

指定管理者制度の概要と導入した場合の効果や問題点をまとめたもの。

・資料 4

文化施設の評価についての論文、参考意見。

公立の文化施設を評価する場合、総合的な見地からの評価の必要性が述べられている。

・資料 5

「これからの博物館運営」(神田正彦 2007. 2 学術動向)

また、参考資料として本日、委員に DVD を配付した。西部小学校が行った「南極教室」、竹島小学校のミュージアムシアターでの研究発表会(情報ネットワークセンター、水族館、竹島小学校共同事業) を収めたものである。これらの事業は、紙面や数字によってその良さを伝えることができないため、動画による資料ということでぜひ観ていただきたい。

委員質問、意見・回答

委員

この委員会は、「存続」か「廃止」を検討する委員会であったが、前回、採決をとり存続と決まった。見直し検討であれば別の委員のほうが良いのではないか。教育委員会としても廃止が通らなかつたらもう行く必要はないという意見だった。委員会の目的が変わってしまったという気がするが、委員長の考えは。

委員長

反対でも、その中でまたこうしたらいいというようなお考えもあるかと思うが。

委員

全く無い。廃止しないで見直すということは教育委員会としては頭になかった。最初の検討委員会を一度終えて、もう一度見直すということで委員を募ってやるべきではないかと私は思う。反対した委員は残れないと思うが。

委員長

今のご意見に対して他の委員のお考えは。

委員

意見が違うので難しい、そういう立場ではないというふうになるだろうが、今まで出てきたいろいろな意見の中で、そういうものをひとつに集約できるものがあればということころであるので、今日はそういう方向性で進めていければ良いと思う。

委員

いや、今日ということではなく、今後この委員会が変わる、この間の採決によって変わるのではないかと思う。だからまた委員もそれによって少しは変えてもいいのではないかということ。前は存続か廃止かの見直し検討委員会だった。委員会としての方向性が違うのではないかと思う。

委員長

委員長の立場で話をすべきことかわからないが、スケジュール的には、今日の分も含めて今までの皆さんの意見をまとめ、市長への報告書のたたき台を作っていく段階に入ろうとしている状況である。改めて委員を募ってということはいかかなものかと思う。

委員

それでは委員長の意見に従う。

議題1 施設の目的・使命・役割について（協議）

委員長

議題1、施設の目的・使命・役割についてということでご協議をいただきたい。

資料2の「運営手法を決めるまでの手順」の（4）まとめに記載されている流れに沿って、資料1の意見分類を参考にしながら進めていきたい。なお、本日欠席の方が二人いらっしゃるが、欠席委員からの意見があれば事務局のほうから報告をしていただきたい。

事務局

2名の委員からそれぞれ出ている。まず、議題1、施設の目的・使命・役割に関する意見ということで紹介させていただく。

〔事務局が欠席委員から提出された意見を朗読〕

（意見1）

・情報ネットワークセンター部分

センターの現状分析として、設立当初の位置づけを明確にすると情報ネットワークセンターの役割の1つが情報推進であって、そのために情報機器を利用した科学館が存続した。現在までに情報ネットワークセンターの果たしてきた役割としては情報ネットワークセンターの情報基盤部分はもはや行政の一部であり不可欠である。さらにインフラストラクチャーとしてのネットワークも充実してきた。情報推進の立場から見ると科学館の役割としての情報機器に親しませる活動は役割を終えつつあり、リテラシーとして、つまりリテラシーとはIT社会に対応できる能力を育てるための教育活動や講習会も成熟してきた。

今後、情報ネットワークセンターの果たすべき役割として大きく2つある。1つが情報インフラの運用とそれを充実させる分野。もう1つは情報推進の分野である。インフラ部分やネットワークの安定運用とその充実を図っていく分野については必要経費と考え収益は期待しない。また、もう1つの情報推進の分野においてはコンテンツに関わる次のような活動が必要と考える。1つは情報環境を利用した趣味・研究のグループ活動の支援。これについては支援のための指導料または施設利用料収入も考える。もう1つは情報弱者に対する情報環境に対応できる能力やノウハウの共有。これについては教育のための指導料収入を考えてはどうか。

・生命の海科学館部分

現在までに科学館が果たしてきた役割では、化石という実物を持つ一方、高度な情報機器を利用してディスプレイによる魅力ある展示を行い一定の成果を上げた。しかし、情報機器に親しむという役割は減少しており、多大な費用がかかるため展示内容の更新が行えず、リピーターが少なくなってきた。そこで今後生命の海科学館の位置づけとしてはコンテンツを使うことにより情報機器に親しむという役割は持続するものの、展示内容の更新

などを行わず、現状維持または漸次縮小をし、学校のカリキュラムと連携した展示を行うようにする。

そして今後は次のようなコンセプトを明確にした活動が必要と考える。まず、観光客向けとしては観光施設の一環と考えリピーターは期待しない。入場料は徴収する。次に近隣も含む市民向けとしては教育施設の一環と考える場合と趣味や研究のための市民グループの活動・発表・展示の場とする二通りがあるが、まず、教育施設の一環と考える場合には各学校のカリキュラムと連携した展示を行い無料とする。また、趣味・グループ活動・発表・展示の場とする場合は発表者からは施設利用料を、参観者からは入場料を徴収する。

(意見2)

(議題ごとに意見が整理されているため議題1に関する内容について朗読)

子供たちに科学に触れさせる、科学の好きな子を育てるという教育を目的とする。

委員長

この議題については、既に前回もいろいろなご意見をいただいたが、次回には、先程申したように市長への報告書のたたき台をまとめていきたいと考えているので、再度忌憚のないご意見をお伺いしていきたい。施設の目的・使命について、ご意見があれば伺ってきたい。このことについて事務局から何か補足があれば。

事務局

資料1の下の方に四角で囲ってあるところを見ながら、検討の前提としての確認をしていただきたい。

生命の海科学館というのは、情報ネットワークセンターの情報推進の為の情報機器を利用した科学館という位置づけにある。ここにあるように、情報ネットワークセンターの中に生命の海科学館があると、こういう位置づけである。これをどのようにするかということとを前提段階として議論していただく必要がある。

議論は、2つあると考えている。1つは、センターの位置づけの確認である。センターの位置づけに変更がないことの確認、センターが情報推進の役割を担うというコンセプト、ミッションについては変更がないことの確認である。ただし、この括弧書きにあるように、施設の配置、1階まで科学館を動かしたらどうか等々の施設の配置であるとか運営方法は協議対象とするということの確認をしていただきたい。

2つ目が、科学館のコンセプト、ミッションについてである。公の施設は、条例によってその目的や管理方法が定められているが、現在の科学館は、「蒲郡情報ネットワークセンターの設置及び管理に関する条例」に規定されている。要するに、センターというものがあって、その中の1つのセクションとして生命の海科学館があるという位置づけである。科学館は、通常でいう本来の科学館事業をやるのではなく、高度情報化の為の機器を体験できる場とするという意味の「高度情報化の事例空間施設」としてこの科学館を使ってい

くということになっている。センターで蒲郡市民が最新の情報テクノロジーを意識することなく享受できることを体験する、体験できる場ということで科学館が建てられている。しかし、これもどうかということの議論ができるかもしれない。10年前と比べてパソコンの利用率はどうなのか、パソコンが分からないものという感覚は現在どうなのかということも議論の対象とすれば、本来の「科学館」という独立した施設、センターと対等な施設という考え方をしてそこにコンセプト、ミッションを新たにあっていくことが必要になるかもしれない。これがこの下の図のような位置づけである。科学館ということについてのどのようにお考えになるということをもまず議論していただき、それで、センターの中の科学館でないとしたら新たなコンセプトを考えましょうということになる。

科学館が誰の為の施設なのか、どのように使うのか、何が目的なのか、ということの議論を通して、役割、使命等を検討していただきたいということである。

<施設のコンセプト・ミッションについて>

委員長

この施設の役割、使命、目的これを皆さん方に改めて確認をして、きちんと明確にしていきたいということで説明があった。今説明があったのは、資料の1の四角の囲みの一番下の説明かと思う。科学館に独立性を持たせないとそのコンセプト、ミッションが曖昧となる恐れがある、この辺をはっきりしようではないかというような説明であったかと思う。その辺のご意見をお聞きしていきたい。

委員

ネットワークセンターと科学館があり、施設自体がどこまでが科学館かはっきりしていない部分があるので、今回を機会にして、やはり独立性を持たせるという形の方がきちんとしているのだろうと思う。

委員

事務局で今一番長い方は何年おるのか、そこの配置で、館長を別にして。

事務局

8年目の者がいる。

委員

ひとつのものに継続性を持ったしっかりした事務局がついていないといけない。市民病院もそうだが、結局市民病院の事務長が4年あたり、2年あたりで代わってしまうから、あの状態になるのであって、私立病院がなぜつぶれないかと言ったら、事務長がしっかりして金の管理をしているからである。それと、市民病院の院長と言えども医者給料を決

めることができない、医者を雇うことができない、雇われマダムより酷いから市民病院がああなっている。やはり継続して同じ人が何年かここをやって計画を持っていかないと、非常に事務局の説明だけでは通り一遍だなという気がする。科学館のターゲットというのは誰でもいいが、今一番求められるのは市民に税金を使っているということを納得していただく、これだけ赤字を出しているということを市民に納得してもらう、ここが一番重要だと思う。

委員

今まで意見を言ってきて、ここへきて条例があるからこれに沿っていると今言われた。最初は自由勝手に意見を言ってきたが、こういうのを見ると最初にこれを提示して、この中でこう我々は、僕自身は考えなくてはいけなかったというふうに思った。それで、この施設のコンセプト、ミッション等については、情報ネットワークというのと科学館があって、情報ネットワークが先程の意見の中にあっただが、1つの使命というか、情報ネットワークというのは日進月歩早いので、1つの役割を終わっているのかなという感じがする。

科学館というのは教育ということと観光ということと、いろいろ書いてあるが、私はこれからの観光というのはただ単に物見遊山で来て観光客が増えるということではないと思う。教育でいくと体験学習、どこかへ行くときにただ竹島があるから行くのではなく、そこに行って海の環境、勉強をする為に来るというふうにやっていかないといけない。本来だと小学生、中学生の研修というか、校外学習の一環としてここへ来るとのことなので、私は、観光というのはこれから体験学習というか、こういうことをやっていかないと観光客は来ないというふうに思っている。そういった意味合いで前回存続ということをやったわけだが、そういう形で観光客を増やす、ただそれは物見遊山の旅行、どこか見学をすればいいではなしに、やはり体験学習ができる施設、こういう在り方がいいと思っている。

事務局

条例については、あくまでもネットワークセンターを立ち上げる時に議会の議決を頂いて作ったということであり、今回の検討委員会の検討結果を受け、それを実行することになったときに条例を変える必要が生じれば、それに従って条例変更を検討していくということになるとご理解いただきたい。

委員

存続ということで進めているが、存続ということと運営ということは、ちょっとかけ離れていると思う。

今、この図をみていると、情報ネットワークセンターイコール生命の海科学館ということだが、むしろこの右の生命の海科学館のほうをもっと前に出して、情報ネットワークセンターのほうが悪化するに下がるくらいの気持ちで集客をしないと、運営ができないのではないか。蒲郡情報ネットワークセンター・生命の海科学館の「生命の海科学館」を前にもっ

てきてアピールをするようにして集客を上げないことには、赤字対策にはならないのではないかと思う。

委員

私は逆で、ネットワークセンターのほうを全面にもっと出したほうがいいのではないかと思う。私は青色申告会の連合会の会長と豊橋の税連協の会長をしている関係で、税務署との関わりが非常に強い。その中において蒲郡市は、はっきり言ってちょっと協力度が薄い。これからは確定申告でもなんでもそうだが、eTax、いわゆる電子申告の時代に入ってくる。そういう教育をしていくのが、このネットワークセンターじゃないかなと強く思う。田原、渥美、豊橋などは、非常に前向きで熱心である。国税局は22年には50%を目標としている。50%というのは納税者の半分の人が電子申告をしなさい、していただきたいという願望である。そんなときにあって、ここでやはりネットワークセンターが税務課と力を合わせて、我々もこういった団体があるのだから、そういったことでここを利用させて頂けたら、これはありがたい、また必要じゃないかなとそういうふうと思う。

委員

私は2月に委員に選ばれてから、何も知らなかったため何度もここに通って話を聞いたが、情報ネットワークセンターがまず出来て、インターネット(パソコン)を活かす方法をとということで科学館にしたと聞いた。入口に説明をいろいろと書いたりせずに、自分で石に触ったり、インターネットを利用しているんなことを知るとというのが目的のひとつであり、両方ともインターネットを利用してということで1階と3階の部分が繋がるという、そういうところもあると聞いたような気がする。しかし、それから9年、その間には裁判もあり、市民の皆さんの気持ちも離れていってしまう、それで科学館が蒲郡の中で一番悪者にみたいに思われてしまった。

この10年で時代も変わって、みんながインターネットもやるようになり、その大事なインターネットではない、おまけとしてみんなに親んでもらえば良かった科学館が、今すごく目に付き過ぎてしまっている。インターネットが赤字ではなく、科学館が赤字になっている。時代が変わったということだと思う。前はそんなに科学館、科学館とは誰も言わなくて、インターネット、インターネットだったと思う。

最初に造りましようと思ったときの気持ちと現在とは変わってしまったのだから、造った当初のままの気持ちではなく、こんな問題も起きてしまったのだから、科学館は科学館でインターネットはインターネット、情報ネットワークセンターの中のおまけのちょっとした狭いところの科学館ではなく、別に独立したような表現の仕方をしてもいいかと思う。

委員

今の科学館の位置づけというものが、どうも情報ネットワークセンターとの関係で中途半端に終わっているのかなという気がする。ミッションとかコンセプトになってくると思

うが、例えば子供の教育とかを考えて、市民に科学心を植え付けるとか、そういった意味で科学というものに力をいれていくのなら、もう少し市はこの科学館というものをしっかり全面に打ち出していく必要があるのではないかと思う。私は、科学館に独立性を持たせてやっていくやり方が一番いいかなと思っている。今、ちょっと中途半端と言ったが、3階部分がほとんど中心になってきているので、1階から科学館として、もう少しいい科学館、内容の伴った科学館として、特に教育普及部門を科学館に持たして、全体的に科学館を考えていく。そういうことで独自性という部分を発揮してもらいたい。こういう考えであるので、情報ネットワークセンターがあって科学館もあると、そういうふうな位置付けがいいかなと思う。

委員長

皆さんのご意見をお聞きしたが、お互いに議論を深めるという意味で、他の方のご意見について、何かお気づきになった点とか質疑があればお伺いしたい。

事務局がしっかりしていないと、例えば市民病院のように担当者が代わっていくと非常に運用が難しいという話。そして観光については、体験型のほうが今、必要とされているのではないかなというふうなお話もあった。また、生命の海科学館の部分を強調したらどうか、または逆にネットワークセンターのほうを強調したらどうかと、また科学館は科学館として何かプラスアルファのものできちんとやったらどうか、現在は非常に中途半端、もっと科学的に力を入れて、きちんとした内容のあるきちんとしたものでなければならないというようなことなどいろんなご意見をいただいた。

このことについて、もし何かご意見があればお伺いしていきたい。

委員

今、意見の中にいろいろ教育ということが出てきて、子供の体験ということを言われたが、石に触ることが体験ではなく、なぜ地球が滅んで、また恐竜が出て滅んで、今、私たちが生きているのかということをおこの科学館にただ来て子供が分かるような仕組みでないと、単に古いものがありましただけでは、とても教育関係としてはもの足りなさを感じる。この間、9月30日に研修会で神戸の防災センターに行ってきた。雨の平日の月曜日なのに開館時間の11時にはもう人が並んでいる。そのくらい神戸の防災センターは人気がある。なぜかと言うと中で体験できるコーナーがあるからである。生命の海科学館の中でも教育で使うのなら、動物はこうして滅んでいったんだということをもっと分かりやすくする、あるいは階段を上って行くときにその階段の途中で溶岩が出てくるとか、3階に行くまでも分かりやすい配置が必要である。何回か来たがそういう工夫があまり感じられない。

委員

生命の海科学館というテーマで、子供達、大人、いろんなことがそこで学べるだろなと

思う。そうなると観光とも結びつくかと思うが、メニュー出しをどうやっていくのか、それが大事ななど。そのためにはそういう人の確保が重要になるのだろうなと思っている。委員の皆さんのところに来館者のアンケート集計結果が送られたかと思うが、私もこれを見て、自分の思っていたものと違う表で、ちょっとびっくりした。意外に市外、県外の方が多かった、それから小学生が圧倒的に多い。それからファミリー層が圧倒的に多い。それから満足いただけただけの回答が、かなりあった。これは先ほど、委員がおっしゃられたコンテンツ、展示作りに繋がっていくかと思う。こういうアンケート結果で満足いただける結果が出た。いろんな展開があるかと思うが、そのようなものを結びつけていくことによって、館のおもしろさというか、付加価値がついていくだろうなと思う。ITをうまく組み合わせる、あるいはイベント企画、おもしろいイベント企画を作っていく、あるいは館そのものにストーリー性・教育性を持たせるというメニューを作っていくという、そういうのが大事ななどと思う。それをやることによって、いろいろな形があるところで、今回のようなアンケート結果が積み重なっていけば、「蒲郡に生命の海科学館がある」という、存在価値が示していけるのではないかと思う。それが蒲郡のシンボル、誇りになればいいなと思う。

委員

私は先ほども言ったが、教育普及という面も力を入れて、例えば学校の先生を呼んで毎月1回テーマを設けて、「台風はなぜ起こるか」「赤潮はなぜ起こるか」そういうようなテーマを持って、ひとつひとつそういうふうに生徒たちを集めたり、どこの学校の先生でも良いが科学に理解を示す先生にそういうことの講師になって来てもらったりとか、そういうことで化石も学芸員にきちんとした人を雇っていけば、そういう説明も十分出来るかなと思う。そういう点で、教育委員会からそういう前向きな考えが出てこないというのがおかしいと思う。

委員

僕らはここを図書館、あるいはまず廃止してもっと子供のためになる施設に見直そうという考えだったので。それと一番の問題は、子供をここに連れてくるとかそういうことに関しては非常に難しいということがある。子供を移動させる安全とか、教育委員会としては子供を例えば市民会館に連れてくるというだけでももの凄く大変なことである。先生をここに連れてきて授業をやるということも、それは良いことではあるが、教育委員会としては子供の安全とかそういうもの、学校以外に出すということは非常に大変な作業である。

委員

でも、子供はどこでも行くのではないか。

委員

子供個人なら良い。

委員

個人でも、グループでもある程度どこでも行くのではないか。

委員

だから、教育委員会としてあそこに行かせるということは非常に。

委員

その考えは消極的すぎだ。

委員

子供たちが勝手に来る分には全然問題ないが、ただ僕らはその大変さを知っている。学校で動かすという、あと先生をここに持ってくる時のいわゆる教職員組合の各関係のいろんな大変さを知っているから。だからここがもしも図書館だったら勝手に来るから簡単なことである。団体に動かすか、単体で動かすかということである。

委員

県外の方も来ているし、市外からも来ている。そういうこと考えるとちょっと矛盾しているのではないかなという気がする。

委員

逆に言うと学校の授業で手一杯というか、先生の今のスケジュール見ると学校の授業で手一杯で、総合学習というのがもう今非常に、本当はやって欲しい、やって欲しいが非常に手薄になっている。それがちょっと、今言われることと私の心のジレンマがある。言われるところは本当なのだが、教育委員会の代表としてはそれよりも大変なのが先生の授業時間数というところになってきてしまう。言われることはもちろんなことだと思う。

委員

でも小学校の先生あたりはある程度余裕があるのではないか。

委員

大変である。

委員

蒲郡にあって赤字で大変だという中で、蒲郡市内の小中学校は校外学習で1度や2度は来ないのか。地元が来なくて県外や他に来いというのは、なんだと。

事務局

学校が使う件数は増えている。前回19年度には22校、20年度はもう少し増えるのかなと思う。学校の先生方の反応というのは、私は非常に良いと感じている。今回DVDを配ったというのはそういったことがある。これは西部小学校と竹島小学校が参加した授業であり、このDVDを是非見ていただきたいのだが、学校の児童たちは本当に生き生きとして楽しんでやっている。是非それを見ていただきたいというのと、先生方はなかなか好意的に使っていただいている。学芸員が今回1人いなくなってしまったが、それまでは学校のプログラムに合わせてどういった説明の仕方をするかということなど、先生と非常によくコミュニケーションを取って行っていた。ちょうどうちの学芸員が理科の先生のように白衣を着て、若い女性だったものだから西部小学校の生徒から非常になつかれて、人気のあった学芸員だった。教育委員長と違った意見を言うようで恐縮だが、そういった教育的目的でやるということについてうまくいっているなというふうに、私は非常にいい感触をもっていた。

委員

違った意見ではなくて、それは僕らが使えて言っているからだ。せっかくあるのだから使えて言うから使っているのであって、行けばもちろん良いことだ。生徒も嬉しいし。

しかし、所詮年間1校1回ではないかということである。行くことは良いことであるし、いけないと言っているのではないけれども、ここを中心に何回も学校が使うとなると非常に労力が要る。だからここに来るといことはいけないことではなくて、それでは竹島小が年間4回ここに来てくれと、で、何か授業をやってくれといたら教育委員会にとって凄い労力になるということを行っているのである。年間1回くらいの校外イベントとしては別に私は良いことだと思う。

委員

これもいろいろなやり方があるかと思う。確かに学校が年に何回もここまで来るというのは無理かと思う。ただ、今までもそうだったが、出前講座というのがある。こちらから学校の方へ出向いて学校の方でいろいろやる、それとここへ来てやる、それをうまく組み合わせるとータルで科学の面白さ、そんなものをしていくという、これは結構好評であって、これからもそういうことをうまく組み合わせれば良いのではないかなと思う。それで、それがひいては子ども会の活動とか、修学旅行とか、あるいは生涯学習の面とか、そういうふうに繋がっていけば面白くなるのではないかなと思う。

委員

毎回、皆さんから良い考えがたくさん出て、これなら良い科学館ができるのではないかなと思いながら帰っている。私も何回も通って、やはり見てなぜこうしなかったのか、なぜあ

あしなかったのかというのを聞いたら、裁判をやっている間はその中の化石をあちこちに動かしたり、あちこちをいじったりはできなかったという話だった。科学館がこうなってしまった大きな理由はそれだと思う。私たちでも思いつくのに、この中で働いてみえる方たちが何も思いつかなかったわけではないと思う。裁判をしている間は、変えたくても変えられなかったのではないかと思う。意見が全部採用されるとは思わないが、良い意見は市長へ報告したときに活かしていただきたいと思う。

それともうひとつ、5月まで若い女性の方で山中さんという学芸員の方がいらっしゃった。3時間くらいお話を伺ったことがあるが、若い方なのに化石が専門でこの科学館が大好きだということだった。科学館に対して、いろんなこと子供にやらせたい、あっちも行きたい、これもやりたいで、落ち着いた真面目な方だったが、ここの活動を楽しんでやってみえた。私は分からないものだから「ここでコンサートなんか出来るんじゃないですか、赤字だ、赤字だと言っているから、コンサートでもして皆に知ってもらうのが一番でしょう、知ったら中にも入ってくれるでしょう、何かやればくるでしょう、同じこと繰り返してれば来る人は増えるでしょう」ということもぶつけた。そうしたら「やっています、コンサートもやりました、こういう月を見るだとか、星を見るだとかも夜やりました、石も拾いに行きました、あれもしました、これもしました」で、そこで初めてここで何をやっているかを知ったのだが、その方はそうしたことをするのが凄く好きだということだった。蒲郡の科学館も大好きということだった。しかし、正規の職員ではなかった、それがご本人もちょっと納得がいかない、ちょっとそこが情けないと言ってみえた。大好きで、行動的で、活動的で、情熱的で、それで真面目で労力をおしまないような素敵な人がいたのに、ここの会議が始まったすぐ後に辞められてしまった。私のしたアンケートも全部見せてくださいと言われて、これからやるぞと思っていると思った。こんな人がいたら大丈夫だなと思ったら5月に辞めてしまった。何とかして蒲郡のために働きたい、蒲郡の子供たちに広めたい、どこでも行きますよ、何でもやりますよというこの人を、戻って来られるように手を打って、この人に全部お任せするとは思わないが、こういうやる気のある人にちょっと知恵を借りて、活力をいただくのがいいかと思う。

委員長

良いご意見をいろいろいただいた。まだ、次回もあるのでひとまずこのくらいで次に進みたい。今までの流れの中で、なかなかまとめるにもちょっと難しいと思うが、事務局どうか。

事務局

先ほど委員長が言われたように市長への報告形式、そういった形で議題1だけに限らず、すべて終わった後で、一度作って「たたき台」としてまた各委員さんに見ていただくということをお願いしたい。

<運営方法について>

委員長

それでは、次に進行したい。この資料の2ページ目の2番に運営方法に関する意見というのが列挙してあるが、このことについて少し皆さんにご意見をお伺いしていきたい。1番目にセンターと科学館の配置、場内の配置、これに関する意見。2番目は施設の名称に関する意見、生命の海科学館の名称のこと。「せいめいの海科学館」と読んでしまったり、その辺をはっきりしたらどうかという意見があったかと思う。3番目に地域参加型コミュニティ施設に関する意見。4番目に入場料金の見直しに関する意見。5番目に他の施設や大学等の連携に関するご意見などの運営に関する意見があった。このことについて、ご意見があればお伺いしたい。これは前回出た意見なので他の人がみるとまた見方が違うのかなという部分もあると思う。今申し上げた項目の中でお気づきの点があればご意見をいただきたい。

事務局の方から何かこのことについて補足はあるか。欠席の方のご意見はあるか。

事務局

欠席委員から1点だけ受けている。

〔事務局が欠席委員から提出された意見を朗読〕

(意見)

1階の利用方法については今のままではもったいないので、何か考えた方が良い。

委員

まず4番目の入場料金の見直しというのは、タダだから来るといってものではないと思う。きちんとお金を取って、先ほど何でいけないのかといたら、展示物を金がかかるからなかなか変えられないと。同じ物だったらリピーターは来ない。本来、金をきちんと取って新しい物を入れていくのがやはり存続する意義だと思う。取らなくて、ただその代わりに設備投資もしないということであれば、ギリ貧になって廃止になっていくと思う。入場料金はきちんと取ってそれだけの内容をやっていくのが私の意見である。

その下の他の施設との連携について、これは最初に私が言っているのだが、ここだけに観光客が来るわけではない。駅前がこの4月からきれいになってここは一等地だと思っている。なぜこの成績が悪いかと言えば、再三言っているが営業努力がされていなかったことにある。中身よりも、来てもらうための営業がなかったような感じがしている。一等地であるということを考えて、他と連携して本当にこう来られるようにすると。蒲郡駅から歩いて竹島周辺が観光できるというような観光地であるといいなあと私は思っている。観光のあり方について、施設があるとか自然がある、それ以外にやはり健康を考えると

環境を考えるとということで、本当は蒲郡がそういう温泉郷であるといいなぁというふうに思っている。それで、環境、蒲郡市の観光は何かと言えば、海のまち蒲郡、あるいは温泉と言っているけれど、温泉もかけ流しではないし、そういった点では、環境の蒲郡だというふうに考えると、先ほどの科学館の地球と環境ということを考えるまち。こういうふうになっていくと私はいいなぁ、売れるなぁと思っている。

委員

地域参加型コミュニティ施設に関する意見ということだが、やはり先ほどから色々皆さん子供をここに連れてきて何か教育の関連にしてほしいというのはすごく分かるし、そうしたいと思う。そうするためには、やはり、じゃあ私たち教育委員会が主催して一番チケットが売れる催し物と言ったら「でんじろうの科学」、あれは2時間で完売である。そのぐらい人気がある。親子でそれを見ようとか、そういうのを教育委員会でやると市民会館が満員になる。そういうものをここでやってくれば、親子で来ても楽しいような所になると思うが、今のままでは残念ながら、先生がここで授業をやるというようなこととか、僕の思っているのと何かがちょっと違う。でんじろうのような液体窒素とかそういう普段学校では使うことができないような物があって、ある程度危険でもいいような、実験室でできないことがここでできるという施設であれば、学校がもっと積極的に参加しやすくなる。あそこに行かなきゃできない実験があるんだというものを作ってほしい、税金を使ってでも子供たちがあそこで実験ができるという場所であってほしいというのが私の考えである。

委員

私も教育ということをややはり前面に出して、教育を中心に観光としても受け入れる体制を取っていくのが一番いいという気がする。それから入場料金に関しては、やはりある程度入場料金を取った方が良く思う。今、100円出せばずっといつまでもという考えがあるが、その辺は年間パスポートとか、5年間で500円とか、そういうような形で入場料を少しだけ取るような形をとっていくということがいいかなぁと思う。ちょっと今のやり方ではもったいない。ただ、700円というのはちょっと高い気がするので、その辺は下げたりして、もう少しそういう点はよく考えていただきたいと思う。

それから先だっの観光交流サミットに私も出てきたが、篠田さんが、生命の海科学館の呼び方を間違えていた。それから、篠田さんは、「海から見るとやはり蒲郡は美しく見えるのだけれども、駅から降りて、順番に科学館、水族館に行くと何ともみすばらしい、貧弱な見栄えだ」と、そういうこと言っていたが、確かにそうだなぁと思った。今の水族館にしても本当にみすばらしく見える。ある程度外見というものをしっかりとアピールしていくということは必要だと思う。順番に行くと本当にこう貧弱なものと、そういう感じがする。そういう点からするとやはり全体的に、いろいろな施設がレベルアップしていくとともに、外観もそれなりの外観にしていく、そういうことが必要という感じがする。

委員

私も外観がすごく汚く感じる。木で造れば月日が経てば汚くなるのが分かっているのに何でこんなことをしたのか尋ねたところ、設計された方は、こうなることを考えて造られたそうである。京都かどこかの建物に見立てて、これを最終目的として。造られた方はやったと思っているのだろうが、私たち何も知らない者が見ていると、真っ白なサツキが植わり、花が咲いたときにどうして白かな、どうして汚い屋根かなと思う。蒲郡駅から降りて、広い通りに出て、何ができるのかといたらこれである。もっと外から見ても科学館らしいとか、インターネットを扱っているところらしいとか、ちょっと入ってみたくなるような色には変えられないのかと思ったのだが、それができないようである。設計した人の権利か何かがあって、ゴチャゴチャいじれない。私は最初、ここに石でも魚でもいいから描いてしまえば、誰が見ても「あっこういうものを行っているところか」と分かるじゃないかと思った。しかし、実際は、「情報ネットワークセンター」と「科学館」という字を入れるのも大変だったらしい。そういうところがあるから、思ったことがいっぱいあっても結局できない。

子供のことに言えれば、私は、蒲郡の小学校に入った子は全員が科学館に入ったことがあるというふうになったらいいと思う。石を見たり、触ったり、土に興味を持ったり、子供のときに石に触ったことがあるからと古墳に興味を持ったり、外国に興味を持ったり、そういうふうな子供が生まれたらいいなと思う。私たちは少しも面白くないと思っても、子供はキャッキヤ、キャッキヤと笑って、機械をいじっている。だから、蒲郡の子供はみんな来る機会がつくれたらいいと思う。自分で来たり、親子で来たり、学校から来たりで、「ああ、科学館知っている、じゃあ蒲郡の子供だね」というぐらいになったらいい、希望であるがそう思っている。

委員

やはりPRが足りないのではないかと思う。例えば絵手紙大賞なんていうと、だんだんと知られてきて、全国から来るようになった。そんなことで、利用の方法が何かあると思う。ホームページなどで6か月間ぐらいの猶予をみてイベント情報を募集して、ある程度思い切った商品を差し上げるということをすれば、「えっ、こんな考えもあったんだ」というイベント情報というか、何かそういったものが得られるのではないか。そうしたらそれを基盤にして、運営に活かされたらどうかとそんなふうに思う。

委員

料金の見直しに関する事だが、市外の方から700円、市内は無料っていうのもちょっと理解ができない。これ、もらっている資料を見ると、市外から来ている人が半数以上、約半数である。これは市内の方も、こういう時期が時期で赤字ということだから、市民にも料金を払っていただくというような形でいきたいと思う。それから、水族館も収入と支出がだいたいツープイぐらいで運営されているということだから、こういうものを回れる

ようなパスポートみたいなもの、どこそこを回って、科学館入って、竹島の方に行って水族館を回ってというような、こんな料金体制も考えてみたらどうかと思う。

委員

知っている人はいいが、知らない人は中に入るのにここがどういう施設かというのが今のままでは分かりづらいのではないかと思う。アプローチが大事だと思うので、費用をあまりかけずにうまくできる方法があれば、1階から3階までうまく連携するようなデザイン、科学館に来たという雰囲気になったらいいと思っている。

議題2 施設の目的・使命・役割を実現するための最適な運営手法について（協議）

<運営手法について>

委員長

それでは、議題2の施設の目的・使命・役割を実現するための最適な運営手法について、これからの運営に関して、その手法ということで協議をお願いしたい。運営体制とか経営体制、このことについて、まず欠席の方から何かご意見があればお願いしたい。

事務局

最適な運営手法については、欠席委員から3点ある。

〔事務局が欠席委員から提出された意見を朗読〕

（意見）

- 1．市内の理科の先生を含めた運営委員会を作る。施設を利用した子供たちへの科学プログラムを作る。
- 2．生命、海、化石にこだわらず、天体、星座など、科学一般に広くテーマを設定する。
- 3．よいプロデューサーと学芸員が必要。

委員長

運営の方法と手法というのがちょっと区別しにくいと思うが、何か皆さんからご意見があればお伺いしていきたい。それから冒頭をお願いしたように、市長への報告書を作りあげてまとめていきたい。今回いただいたご意見を事務局の方で取りまとめて、たたき台を作ってまいりたいというふうに考えている。そのようなことも合わせながら、ご意見があればお伺いしていきたい。

委員

私は、何でもかんでも民間の力を借りてやるということは反対である。市の方がそれなりの覚悟を持ってやってもらわないと。これは市の施設として造ってきたわけだから、それなりの覚悟を持ってやっていかないと絶対できないと思う。民間の力を借りるというのは、それはプロセスとしては必要かもしれないが、市役所の方がしっかり責任と自覚を持ってやってもらいたい。そういう体制でいかないとできないと思う。

委員

運営についても、今おっしゃった通り、事務に携わる方が運営をやるということだから、実際にはお任せするしかない。我々がここで意見を言っても、さあ、また運営が始まったってことになれば、事務局でそれに携わる方が運営をしていくということだから、その方々にお任せをするということになると思う。赤字という、民間で言えば考えられないその重荷を背負っているわけだから、それをわきまえた運営をするということが一番大事かなと思う。

委員

先週の土曜日の10月11日から昨日の日曜日まで蒲郡は、蒲郡市交流ウィークをずっとやった。それで、この期間に蒲郡市内に宿泊した方に「ぐるりんバス」と「ぐるりん船」というのをやった。これは、3つの事業で、1つは蒲郡駅にJR等で来ると荷物を預かる。預かって手ぶらで市内観光してください、その荷物は宿泊ホテルに直接送っておきますというサービスをやった。2つ目は市内で降りると西コース、東コースに分けて無料バスで巡回できる「ぐるりんバス」。それからもう1つは「ぐるりん船」。これは西浦を出て、ここの今のマンボウのところと、ラグーナを回る船である。第1回目で宿泊者に十分な告知ができていないためにそんなには利用者がいなかったが、ゆくゆくは蒲郡へ来たら手ぶらで観光ができるという観光地にしていきたいという思いがある。これはマイカーを使わずに排気ガスも削減し、環境に良いと思っている。環境にやさしい、蒲郡に来ると環境にやさしいこういう観光ができるということを今年は1回目としてお金かけて9日間やった。これは乗った人は皆さんいいというふうに分かっているが、ゆくゆくはこういう観光地にして、市長の言う宿泊客を増やしていきたいという思いのために今年第1回目をやった。

その中で、船というのは、伊藤造船が7月、8月の2ヶ月だけ渡船をしており、あと10ヶ月ははっきり言って船は遊んでいるわけである。それで、蒲郡は海の街でありながら船が活用されないで私はぜひ活かしたいと考えている。そのマンボウを船乗り場にぜひひきたいと思っており、そう考えるとここらの一帯は一等地だと思っている。従って廃止か存続ということになっているが、私が再三言っているように、ここ一館だけがどうのこうのではなしに、ここら辺全体をどうしていくかということの中にこれがあるわけで、これを活かされないというのは先ほどから言っている営業力の問題だと思っている。営業力不足で赤字になっているわけだから、中身を良くするにはまた金がかかるので、まず、もう少しお客さんをお呼べるように営業努力をして、稼げるようになってから内容をより良

くしていくということをぜひ考えていただきたい。

委員

存続見直しということになったので、教育委員会の希望としては、地域の子供たちがしっかり使ってもらえるような運営をしてほしいということ。それに関しては、例えばここでやった南極教室みたいなもの、これは一過性のものである。だから継続性のあるものを作ってほしいということである。それと学校の授業では実現できない体験ができるような施設になってもらえれば、学校も積極的に使わざるを得なくなるし、「あ、使って良かったなあ」と思う運営をしていって欲しい。地域の子供たちのためのことを考えたら何がということを考えて欲しいというのが希望である。

委員

私も総代会から何と言われるかわからないが、やはり地域ふれあい活動とか、そういうところでもこういうところを利用してもらいたいと思っている。前に言ったように草取りとか防災訓練とかそういうことばかりやっているものだから、やはりこういうところも親子で来て、一緒にテーマを設けてやれば、市民全体に少し広がったり、今まで来たことのない人に来たりしてもらうことができると思う。これは総代会の方にちょっと一言言っておこうかなと思う。

委員

先ほど私が税のことを話したが、聞かれた方は私の言ったことがほとんどわからなかったのではないかなあと思う。本当は、会計ソフトをお貸しするので、それに基づいてやっていただくと。それで住基カードというのにも必要になってくる。だから、皆さん「俺のところはそんなのはやっていないから」とか「税理士に任しているから」とか、そういうのではなくて、やはりこれからの時代、本当に必要になってくる。俺はパソコンができるけど、そういう会計処理とか税務処理はできないからではなく、本当に真剣になって考えてもらいたい。そう言えばここは利用する価値がぐっと増えてくる。

委員

市内の学校、市内の人々対象の話が非常に多いが、やはり市外にもっとアピールをして、市外の方に来ていただくような努力をしてもらいたいと思っている。市内では限られた人口しかいないので、どうしても入場数を増やすためには市外、あるいはもっと県外というような幅広いところまで、アピール、宣伝をしていただきたいと思っている。

委員長

たくさんのご意見をいただいているが、また後、何かあればお聞きしたい。少し先に進めたい。

事務局

事務局の方から一言、資料の作り方がまずかったためか、運営方法と運営手法との区別がなかなかしにくい形になってしまったと思う。ここで検討していただきたいポイントは2つある。1つは、目的や役割を明確にすること。要するにミッション。何のために施設があるのかということである。それともう1つは、ミッションを実現するための最善の体制作り、つまり運営手法ということであり、その責任者に権限を与え責任を持たせるということになる。

センターと科学館が対等ということは、科学館にもそれなりのポストの者を置いてその者に権限を与える、イコール責任を持たせるということである。指定管理者の資料をお配りしたが、指定管理者制度もつまりこれと同じで、その管理者に施設の管理権限を与え責任を持たせるという制度である。民間に権限を与える、民間に運営を任せる、お前たちやってみなさいと。それで上手くやれば良いけども、そうではなかったら違うものに変えるよと、民間はそれが得意であるが、これまで公のものはそういう手法が欠けていた部分があった、そのため指定管理者制度が導入されることにもなった。

文化施設を指定管理者にやらせるということの良くない面は、先ほど委員からもあったが、では市がやるとしたら、その者に独立した権限を与え、イコールそれに見合う責任を与えるということが必要だということになる。

今のセンターでの私の立場で言うと、安定した通信を維持するためのネットワーク的なことや市のホームページなど、現在の市の業務はコンピュータが止まってしまったり一日一秒たりとも仕事が行き届かなくなるが、そういったものを管理しながらその中の1セクションとして科学館もみている。しかし、そうではなく、そこからひとつ出して科学館は科学館で独り立ちをするということであれば、科学館の管理権限を全てその長に与えるとともに説明責任などをしっかり持たせるということが必要ではないかということである。

そのような運営主体のあり方を想定して手法ということで作ったが、なかなか分かりにくく、手法と方法が少しミックスされた意見となってしまったと思う。

<評価方法について>

委員長

最後になってきたが、運営評価について。やはり立場によって、あくまでも経営改善を前提としてやらなければならん、そういう考えもあれば、しかしながら教育とか地域のコミュニティ、そういうものを優先すれば、当然採算が後になってくるというようなところもある。運営評価について、皆さんどのようにお考えになってみえるのか。この見直し検討委員会のそもそもは、やはり経営改善ということが前提であったと思うが、しかしながらいざこれを進めていこうとすると、それはちょっと難しいという部分もあると思う。皆さんから少しそのあたりのお考えをお伺いしたい。

委員

元々収益を上げるということを目的にしてない、そういう存在ということで数字のことについては、なかなか難しい面があるかなと思う。評価としては、ここがいかにか利用されるかということだと思う。やはり入館も含め、また先程もあったように、例えば教育の中で出前で使うとか、そういうのも1つのこの施設の利用法ということの中であると思う。そういうことも含めて、今まで評価としてあまり外に出ていない気がする。そういうところを掴んでいきながらということが必要である。それから、今回最初の議題にあったように、ネットワークセンターと生命の海科学館が一体として考えられて利用数を見るとか、そういうこともあったと思うので、ネットワークセンターとしての評価ということと、それから科学館としての評価を別々にきちんと見ていくことが必要かなと思う。その中で整理をされていくべきである。

委員

元々その赤字というところが一番問題でこういう検討委員会が行われているのだから、私は非常に難しいとは思いますが、いわゆる館長の権限として、これは病院の医長もそうであるが、非常に運営に貢献して黒字にした職員に対して、じゃあ給料を上げられるかと言ったら上げられない、それは市長の役務。だから結局そういうことがないと下の人も張り切らないのではないかと、僕はそういう空気感を持っている。もっと館長とかに、ここの施設の中で評価して給料を上げてやろうとか、そういう権限がないと難しいのではないかなと思う。今のまさに市民病院がそうであるが、市の職員として扱われていると黒字にするにはそういうところがないと難しい。同じようなことかなというふうに思う。

委員

評価については、確か蒲郡市のホームページに18年、19年の各施設の評価が載っているのがあった。事務事業評価。今はちょっと見てないが、あれを見てお役所がお役所を評価すると、100は100、まあ99個ぐらい良いというふうに書いてあったのを覚えている。これは誰が評価するのかというのが問題である。市役所がやって市役所が評価したら、たぶん残っていく。私はその辺に不信感がある。誰が評価するかが問題である。各事業がこうなるとホームページに書いてあるので、あれを見たときに、なんだか全部が全部の評価が良くて、平均点以上。いわゆる真ん中がCでA B C D Eとすると、C以上がほとんどであって、そのまま残っているのを見たことがあった。今の話では市がやるということのようだが、評価は誰がやるのかなということは大変気になるところである。

委員

業績を上げる、給料は下げろで一番難しい問題である。市の職員としての給与体制では、給料を独立採算のようにしていくということもできない。しかし、長期にわたってここで

勤務するという事は大切だなと思う。内容をよく把握して、どういうアピールをするか、あるいはどういう営業をするかということ指導できるような市の職員、本庁の方じゃなくてこっちは出先だが、できるだけ長くここで勤務ができるというような形でないと本腰が入らないのではないかなと思う。実際には、本腰を入れなければこの営業は成り立たない。これだけの赤字ということは、民間では考えられない数字である。ここへ来た職員は本当に辛い思いを連日すると思うが、市民のため、市のためということで頑張っていたらいいと思う。

委員

先程事務局からも話があったように、この施設に対するの権限をもう少し、今以上に持たせてあげたらいいのではないかな。これは強く思う。

委員

赤字ということの問題にすれば、お金が入らなければ仕方がない。お金が入らずに人だけ入っても何ともならない。まず、今のイメージをとにかく変えて、子供が喜べば一般も喜ぶ、観光客の方も喜ぶと思うから、そういうふうにお金を貰える展示方法とか考える必要がある。お金が少しでも入るようにして喜んでもらえるような方法はあると思う。良い人材を探して、先程申し上げた山中さんのような方に来ていただく。中身が良ければみんな良く見えるものである。

もう一つ、最初の頃すごく気になっていたのが、私のしたアンケートの中に「あんなところ二度と行くか」、「あんな科学館全然面白くない」という意見がすごく多かったということである。科学館が非常に変なところと思われる。イメージの悪さをとにかく取った方がいい。裁判のこともあったのではないかなと思うが、今でも皆さんの気持ちは同じではないかなと思う。それにはまず、この中のイメージをチェンジすること。「ああ変ったんだ、館長も変わり、中身も変わり、みんな努力しているんだ」ということをまず市民の方に、市民のそれなりの年配の方に分かっていただいて、まず来てもらい、認めてもらわなければお金には繋がらないと思う。100円かどうか分からないが、少しでも入場料をいただいといてというふうな形にするにも、やはりこのままでお金を出す人はいない。

委員

やはり、市外の方もいろいろ含めてどれだけ満足してもらえるのかということに尽きると思う。なかなか評価も難しいが、トータルバランスというか市の財政も考えながらどれだけ集客を高めていくかということである。いろいろ批評があるが、トータルに考えていくということが大事かなと思うので、やはり数字が出せるものはできるだけ出していくことが必要ではないかなと思う。

委員長

事務局から何かあれば。

事務局

資料4について、ここに評価の方法の難しさというものが書かれている。評価をする場合、観光施設であるのか、教育施設であるのか、文化施設であるのかによって評価方法が全く変わってきてしまう。ここに一つの例として書かれていることと同じことがこの科学館でも言える。大学の先生方を呼んで講演をすることがある。講演をした時に、決して難しい講演ではないのだが、やっていただくと参加人数というのが余り多くはない。ではそんな講演だったらやめてしまえという意見がある。それはどうなのかということである。

人数だけを評価の対象とするなら、タレントを呼べばいい。タレントを呼んでおけば、客引きパンダではないがどんどん入ってくる。果たしてそれでいいのか、公共施設は何のためにあるのか。そんなことを公的施設がやる意味があるのだろうかということがここで書かれている。人数は多くはないが、それを本当に楽しみにしている人、県外から来る人、公演が終わってからも講師に何度も質問をしている人もいる。最先端の研究を本当に分かり易くやってもらう、要するに教育という施設、公共施設ということから考えるとそういうことに意味があるのではないかということである。

だからと言って、赤字垂れ流しでいいか、決してそんなことは有り得ない。どこまで許せるかということのバランスの問題になる。それは結局、一番大事なコンセプト、ここはどのような施設なのかということである。教育施設として全てタダにしても良いという人もいる。また、観光施設だとしてもこの施設があるために三谷温泉に泊まる、西浦温泉に泊まる人がいれば、そこでお金を落としてもらえるのだから、タダでもいいのではないかという意見もある。タダにすれば施設だけを見ると全て赤字である。それでも、それなりの働きをしてくれる、要するにどういう視点で施設の働きを見るかということである。

資料4の下の段に川崎市市民ミュージアムの意見の引用を載せたが、これを生命の海科学館に当てはめれば、100円の収入があって、500円出てしまっている。差し引き400円の赤字になってしまうが、その400円というのをどう見るのかという話である。それは400円なりのインパクト、来て良かったという気持ちを本当に来た人に与えているのかどうかで400円の価値を判断することになる。公的施設の評価というものを人数とか金額だけでやると必ず偏った評価になる。総合評価の必要性とはそういうことである。赤字がダメということならやめるのが一番の得策となってしまう。しかし、やめないということに決まり検討しているのだから、公共の存在価値が本当に来て良かったという気持ちを来た人にどれだけ与えているのかにかかっているとしたら客引きパンダ的なイベントだけでいいのかということも含め、評価の中身について考えていただけたらと思っている。

委員長

今日はたくさんのご意見を頂いた。まだ、ご意見もあろうかと思うが、ひとまずこの程度にさせて頂き、今までの意見の取りまとめをして、市長への報告書を作成していくとい

うふうにしたい。次回は、市長への報告書の案を事務局に作成してもらい、それをたたき台としてご審議いただけたらというふうに思っている。

議題3 その他

〔日程調整：話し合いの結果、次回の検討委員会開催日は、12月17日、午後2時からとし、欠席委員に確認後案内を行う。〕

[閉会 午後3時48分]